

1. 上海港

昨年、上海港のコンテナ取扱高は約 16%増の 2,907 万 TEU (20ft コンテナ換算) となり、初めてシンガポール (2,768 万 TEU) を抜き、世界一となった。(世界第三位は香港 (2,353 万 TEU)、第四位は深セン (2,251 万 TEU)、第五位は釜山 (1,416 万 TEU) である)。ちなみに、日本は東京・横浜・神戸の合計で 973 万 TEU だった。取扱高急増の背景には、好調な中国経済に加え、一見過剰とすら思われるほどの思い切ったインフラ整備がある。

上海洋山深水港は、浦東空港の南約 60 ㎞の海上に位置している。ここはもともと杭州湾の真ん中にある上嵎泗列島で、少数の漁民が暮らす静かな村だったという。2002 年に、増大する港湾貨物流通需要を賄うため、揚子江河口に位置する旧上海港 (外高橋港) に代わる上海港の表玄関として、長さ 32 ㎞ (ちなみに瀬戸大橋の総延長は 13 ㎞、東京湾アクアラインは 15 ㎞) に及ぶ 6 車線の海洋高速道路「東海大橋」とあわせて建設が決定された。現在、上海港全体のコンテナ取扱高のうち洋山深水港が占める割合は約 1,300 万 TEU と約 45%に達している。(残りの 55%は外高橋港。)





↑ 30km以上にわたり海上のハイウェイがつながる接続道路「東海大橋」。

案内してくれた上海総合保税區管理委員会事務局の担当者によれば、洋山深水港は全体が第四期から成っており、このうち第一期分が2005年暮れに開業、その後2006年に第二期、2008年に第三期が完成しており、残る第四期は現在埋め立て作業が進められている。投資額は東海大橋が約100億元（1,300億円。瀬戸大橋の約10分の1である。）、第一期から第三期までが各100億元で、第四期が完成すると総計約500億元（6,500億円）の壮大なプロジェクトとなる予定である。



↑ 第二期、第三期あたりの光景。一枚の写真には収まらない大きさだ。

洋山が新港の建設場所として選ばれたのは、旧港が揚子江の河口に位置するため、上流から運ばれる土砂で水深が浅く、毎年巨大な浚渫費用を要することがあったとされる。しかし、立地を最終的に決めたのが上海出身の江沢民総書記であり、その退任間際に決められた経緯も勘案すれば、同総書記による、これまで支援してくれた関係者に対する「巨大なお礼」という側面があったのではないかと勘繰ることも可能であろう。実際、管理委員会の関係者も江沢民総書記がいなければこれほどの大規模プロジェクトを上海市だけで実施することはとても不可能だったであろうと感想を漏らしていた。

洋山深水港では、インフラの整備は上海市が担当しているが、港湾の運営管理は民間会社（上港集団）に委託しており、同社から更に「盛東」と「冠東」という二社に沖仲士業務を委託しているということであった。二社を競わせることによりコスト削減とスピードアップを図るという趣旨で、コンテナ船の接岸から離岸まで 22 時間という超短時間で作業がこなされているという。また、港湾作業者は作業効率を高めるため、いったん洋山に入ると 3 日間島内で作業し、その後 2 日間休暇という「集中作業方式」を採用しているようだ。

なお、洋山に就航しているコンテナ船は欧米長距離路線の 15 万トン級大型コンテナ船（1 万 4 千 TEU 級）が中心で、ここをハブとして、日本や韓国、東南アジアなどの東アジア航路や揚子江上流に向けた国内航路はスポークとして主に旧上海港に接岸するという使い分けがなされている。営業状況は巨額の減価償却費や借入金返済にもかかわらず「黒字だ」という説明であったが、この辺りは実際の数字をよく確かめてみないとにわかに信用し難い印象を持った。しかし、港湾全体には山のようにコンテナが積み重ねられており、単独で港湾が仮に赤字であったとしても、上海市の経済全体を考えれば十分必要な役割を果たしていることは間違いないように思われた。

2. 江蘇省江陰市と「現代の人民公社」

中国の国内物流には長江の水運が大きな役割を果たしているが、河口の「外高橋港（旧上海港）」から長江を 5 万トン級の大型船が遡れるのは江蘇省江陰市までである。ここから上流は、南京はじめ安徽省、江西省各都市、更には武漢、重慶、成都に向けて、ここ江陰港でより小規模な貨物船への積み替えが必要となる。

江陰市は無錫市傘下の県級市で、人口はわずか 150 万人だが、こうした水運の利便性もあって、歴史的にも豊かな都市として発展してきた。現在でも民営企業が発達した地域であり、新長江実業（香港の有名な不動産グループ「長江実業」とは無関係である。）等、ユニークな企業が点在している。



↑ 江陰港に停泊中のコンテナ船。ここからさらに上流の江西省南昌市に向かう。



↑ 立派な保税施設も用意されている。

新長江実業は江陰市最大の民営企業だが、「長江村」という村の村民を株主として設立され、ボロ船を買ってきてこれを解体しクズ鉄を売却する「拆旧」事業で成功し、その後製鉄や不動産等に手を広げ、「百度百科」によれば、現在は総従業員 5 万 5 千人、総資産 45 億元の企業グループになっている。いわば、昔の人民公社がそのまま企業グループになったようなもので、村民は株主として巨額の配当を受け取るとともに、福利として住宅、自動車等を支給されるとともに、医療や教育費も全て無償で提供されているという。



↑ 長江村の様子。奥に見える豪邸は村人に福利として支給されたものだ。



↑ 村内の公園。リゾート施設と見まごうばかりである。

江蘇省一体は改革開放初期に地の利を活かして成功した村が多く、この分野でおそらく最も有名な「華西村」も江陰市南郊にある。華西村は最も初期の郷鎮企業として繊維紡績事業で成功、その後、金融や不動産を中心に幅広い分野に事業活動を拡大し、1999年には村として初めて深セン証券取引所に上場（証券コード 000936）している。村人は能力に応じて「華西村株式会社」に就職が保証されており、その給与は担当する業務における一般企業同等給与に上乗せして評価され支払われる仕組みとなっているほか、高級住宅や乗用車等の福利が提供されるため、過去 50 年間に同村村民で「華西村株式会社」に就職しない道を選んだのはわずか 10 人にとどまっているということだった。なお、従業員のほとんどは外部からの出稼ぎ者が占めているが、村内には出稼ぎ者向けの無料住宅（希望者は平米 600 元の安価で買取も可能。）も多数建設されており、また、出稼ぎ者の子弟教育や医療等も村の負担で無料化されている。説明によれば、出稼ぎ労働者であっても意欲と能力さえあれば、出稼ぎ者から華西村の幹部に昇進する道も開かれているとのこと。こうした仕組みは江沢民元総書記はじめ胡錦濤総書記にも称賛されており、共産党中央からも「和諧社会の一つのモデル」として公認されているようだ。



↑ 華西村入口。「天下第一村」と名乗るだけあって、中国で最も有名な村である。

昨年には村内に「華西村株式会社」の本社に当たる超高層ビル（72 階建て、高さ 328m）を約 330 億円かけて建設し、農村と超高層ビルという取り合わせが目を引き各種報道が相次いだ。328m という高さは、北京国貿にある国際貿易センタービル（330m）を追い越さないよう、それより若干低くするという趣旨で決められたとのこと。¹相変わらず一部海外

¹ 中国で最も高いビルは上海の環球金融中心で 492.5m である。ちなみに、我が国では現在

メディアでは「農村に高層ビルを建てるとは中国経済バブルも極まった。」と報道されたようだが、実際には同ビルは華西村の本社としてのほか、年間 200 万人ともいわれる同村訪問者向けのホテルとしても機能しており、立派に採算が取れているようである。なお、同ビルの最上部球形部分の高層階には、大量の本物の金で飾られた 800 名収容の宴会部屋があるそうで、今年の国慶節（10 月 1 日）には、中央のリーダーを招待して盛大な催しが計画されているということであった。



↑ 奥に見えるのは華西村ビル。手前の建築は村の施設である。

このように、経済的には文句のつけようがない華西村であるが、その村の権益は書記として長年君臨した呉仁保書記（現：顧問）とその子孫の手に一手に握られており、村人は自分の持ち分を勝手に引き出して私用に使うことは認められていないという。華西村の展示館を除くと国家級指導者と談笑する呉仁保書記の写真に続き、呉仁保書記の子孫一人ひとりの写真が額に飾られて展示され、一人ひとりに詳細な注釈が書き込まれているのを見ることができる。まさにここは中国の中にある独立王国であり、「経済的に大成功したミニ北朝鮮」なのであろう。現在の書記も呉仁保氏の長男が務めているということで、立派に村政の世襲も行われているようであった。

は横浜ランドマークタワー（296m）が最高で、現在建設中の「あべのハルカス」でも 300m と華西村ビルより低い。



← 華西村の飛躍のきっかけをつくった繊維製品。日本の商社やメーカーに対する OEM 生産がメインだが、書記の名前ずばりそのものの「呉仁保」というブランドもある。

なお、ガイドをしてくれた村民に「仮に華西村の投資が失敗して損を出したらどうするのか。」と質問してみたが、「華西村は世界の投資動向を見極めて有望な分野にのみ投資を行っているため損をすることはない。」という説明しか得ることができなかった。華西村の経営がこれまでうまくいったのは、もちろん書記の能力や村人の熱意もあるだろうが、中国自体が高度成長してきた中でうまく流れにのったという側面を無視することはできないはずで、今後、中国経済がどこかでつまづくようなことがあれば、華西村にも大きな波乱が訪れる可能性は否定できないように思われる。

江陰市は上海から新幹線で約 1 時間、高速道路でも 2 時間余りに位置しており交通も便利で企業の進出も進んでいる。興味のある方は、上海を訪れた際にでもぜひ気軽に立ち寄って、「もう一つの中国」をぜひ味わってみたい。

(以上)